

第4回検討会を踏まえた今年度対応状況及び今後の対応(案)について

資料-2  
第5回 阿賀川自然再生  
モニタリング検討会

分類	ご意見等	今年度対応状況及び今後の対応(案)	備考(対応資料)
ヤナギ類	<p>① 三本松地区のヤナギ林について、ヤナギが何年生かは、年輪の観察または直径の計測といった調査を実施すれば、どのように樹林化してきたかわかると思う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 樹高及び胸高直径の測定を実施し、また一部年輪の調査を実施した。その結果をふまえ三本松地区の樹林化過程について考察を行った。</li> </ul>	<p>資料-3 : p.12-16</p>
礫河原指標種	<p>① ウケクチウグイの個体数が少ないが、卵の量が少ないのだと思う。ウケクチウグイはウグイと産卵期も産卵箇所も重なっていると思う。</p> <p>② ウケクチウグイを増やすことも重要であるが、阿賀川全体で魚の個体数を増やしていくことが重要であり、そのために産卵場を人工的につくることも一つの方法だと思う。また水域環境では淵が減少傾向にある。淵を残す、または作るという構想も考えてもらえればと思う。</p> <p>③ 現状では河川内に樹林や礫河原等様々な環境があるため、このように昆虫類も多くの種が生息しているのだと思う。</p> <p>④ 以前、阿賀川の左右岸でオサムシ類の調査をした人がおり、左右岸で種の違いがみられたことを報告していた。そういった現象も阿賀川ではみられることをこの場で述べておく。また、モニタリングの結果が地域の愛好家や住民などに伝わり、貴重な生物の保全について、少しでも市民の協力を得ながら進めて行ければ良いと思う。</p> <p>⑤ 上米塚で確認されたスッポンについて、甲長から今年生まれの個体と思われ、河川区域内で再生産していることが推測される。またマムシについては河川区域内で定着しているか疑問である。カメ類については情報が不足しており、今後在来の個体が残存していることが分かってきた場合に重要な情報となるので、スッポンをはじめカメ類については今後も留意するのが望ましい。</p> <p>⑥ NPOの結果及び本モニタリング結果が阿賀川全体の生態系保全のために活用されることを期待する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 平成26年度から平成29年度までの4年間の礫河原指標種モニタリングによって明らかとなった知見について整理した。</li> <li>● 礫河原環境については、長期モニタリング計画に移行し、引き続きモニタリングを継続する。</li> </ul>	<p>礫河原指標種 資料-3 : p.20-32</p> <p>長期モニタリング計画 資料-3 : p.33</p>
河道	<p>① 非常に精力的に調査されており、ここまで良い成果が上がっていると思う。事業の評価にあたっては、河川の掃流力とヤナギの繁茂状況の関係から、どのくらいの流量で樹林化を抑制できるのか、また何年くらいで樹林化してしまうのかといった現象について、水理学的な指標の目安がつけばよいと思う。そういった観点で次年度まとめること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ヤナギが侵入している区域は、年1回発生流量(240m<sup>3</sup>/s)の冠水範囲の外縁である。H27洪水以前から生育しているヤナギでも同じことが言える。</li> <li>● ヤナギは平均年最大流量時に60mm以上の粒径が移動する区域には侵入していない。また、攪乱生起流量の場合、現在の主流線付近では60mm以上の粒径が移動する結果となり、この区域ではヤナギの流出が考えられる。</li> <li>● 平均年最大流量でも60mm以上の粒径が移動するような掘削方法を検討し、モニタリングとシミュレーションを通じて妥当性を確認していく。</li> </ul>	<p>※代表粒径は70mm、最頻出粒径は70mm以上</p> <p>※平均年最大流量は720m<sup>3</sup>/s、攪乱生起流量は1200m<sup>3</sup>/s</p>